

〈書 評〉

駒澤真由美著 『精神障害を生きる — 就労を通してみた 当事者の「生の実践」』を読んで

山 本 智 子*

(YAMAMOTO Tomoko)

本著は著者である駒澤真由美氏の最初の単著であり、これまで真摯に積み重ねてきた彼女自身の研究における「生の実践」を刻んだ大作である。「はじめに」で書かれているように筆者である駒澤真由美氏は、かつて企業の経営コンサルタントとして働いていたが、配偶者の病死を経験し、同じような苦しみをもつ人々への心理的援助をめざし、臨床心理士指定大学院に入学した。しかし、大学院の実習先の心療内科クリニックでの体験から、こころのケアだけではなく、彼らの生活の基盤を安定させることの必要性に気づき、臨床心理士の勉強を続けながら精神保健福祉士の資格も取得した。そして、研究を継続するために大学院の博士後期課程に入学した。博士課程での研究半ばには思いがけない大病が彼女を襲ったが、それを乗り越え、本著のもとになる「博士論文」を書きあげた。まさに、本著は、著者の命を懸けた大作だといえよう。

筆者は本著を通して、私たち読者に何を伝えたいと思ったのであろうか。筆者である駒澤は「就労」を切り口にして、精神保健医療福祉と雇用に関わる法制度のもとで、精神障害がある人々がどのように生きているのかについて、丁寧なインタビュー調査を行い、今まで語られてこなかった精神障害者の「生の実践」への接近を試みている。そのため、本著で紹介されているどの事例も、精神障害をもちながらも一人の生活者として語られた豊かな「声」にあふれている。

本著における「問い」は二つある。一つは「日本において精神障害当事者は自ら体験してきた様々な「就労」の場をどのように意味づけしているのか」であり、もう一つは「当事者自身が精神保健医療福祉と雇用に関わる法制度のもとで『精神障害者になる』つまりは『精神障害者』のラベルを貼られて、あるいは自ら貼って生きることをどのように捉えているのか」で

* 近畿大学教職教育部教授

ある。これまで語られることのなかった深い課題を問いかけ、多義的な意味をもつ「リカバリー/回復」という概念を用いながら明晰な事例の考察に至っている。

本著に登場する当事者は就労移行支援サービスを利用して一般就労に結びついた人や、精神疾患を抱えながら就労支援員として就職した人、「就労継続支援 A 型」「就労継続支援 B 型」「社会的事業所」を利用している人など多岐に渡る。彼らはそれぞれの場所において、自らの「精神障害を生きる意味」を語っている。そこには筆者という聴き手がいたからこそ語られた圧巻の物語が展開されているのだ。読者には、ぜひ、ここで語られた彼らの「生の声」を聴いてもらいたい。

本著の中で幾度となく出てくる「リカバリー/回復」という概念について、駒澤は本著の最後でこう語っている。本著のもとになった博士論文の執筆指導のプロセスの中でも「果たしてリカバリーという概念は必要か」という指摘を何度も受けたという。しかし、この「リカバリー/回復」に関していえば、本著において、従来、福祉で語られていた支援者側が求めるものとしての「リカバリー/回復」だけではなく、当事者の個人的な希望、人生の新たな意味や目的といった「パーソナルリカバリー」もまたそこに存在するということを駒澤は示している。むしろ、その「パーソナルリカバリー」を大切に支援していきたいという駒澤の思いがあったからこそ、本著の内容が深いものになったといえるだろう。

この「リカバリー/回復」という言葉は、多様な意味をもち、読む人によっては、さまざまな意見を生じさせるものだと思うが、本著が多くの読者に共感され、当事者が求める支援の道筋を示すことができたのは、まぎれもなく、この「リカバリー/回復」という言葉を真ん中においた対話であったことは間違いない。

本著は精神障害がある当事者が就労をどのように意味づけているのか、感じているのかを描いた貴重なものである。そのため、当事者や支援者だけではなく、彼らとともにこの社会を生きる多くの人に読んでもらいたい1冊である。